

岐阜県リニア活用戦略フォローアップ懇談会 議事要旨

- 1 日時：令和6年8月26日（月） 14：00～15：15
- 2 場所：岐阜県庁6階 特別会議室
- 3 出席者
 - (1) 委員
涌井座長、内田委員、小栗委員、加藤委員（オンライン参加）、真田委員、田中委員、森川委員
 - (2) 県
知事、都市公園・交通局長、リニア推進課長、清流の国推進部次長、環境生活部次長、商工労働部次長、農政部農村振興課長、林政部次長、県土整備部道路建設課幹線道路企画監、都市建築部次長、教育委員会教育総務課長
- 4 議題
 - ・「第2次岐阜県リニア中央新幹線活用戦略」の取組み状況について

5 議事要旨

全般

- ・活用戦略に基づく個別具体的な取組みを進める際に、具体化されることで元々の理念が分かりにくくなる弊害もあるため、最初の理念を忘れないようにした方が良い。
- ・「経済のグリーン化」は重要な理念であり、個別の要素の一つとするのではなく、それをベースに人づくりや場づくりを考えていくことが必要。

リニア岐阜県駅及び駅周辺の「岐阜県」らしさの追求に関する取組み

- ・駅周辺整備について、単なる交通結節点ではなく、高速交通結節点としての機能の整備を引き続きお願いしたい。
- ・駅周辺の景観面で、高さ30mの閉鎖的な連続構造物ができるということで、一定程度見通しがきく北陸新幹線と比べても壁という感覚がかなり強い。これをどう軽減するかについてのJR東海との調整にあたっては、前例やできない理由に囚われることなく進めていただきたい。
- ・駅の性格として、交通結節機能を持つ一方で、食事や買い物など、ここを目的地として来て滞留してもらおうということも考える必要がある。中間駅とはいえ相当の利用者数が見込まれると思うので、乗換えがすぐにできるという機能だけではなく、活動拠点となるモビリティハブとしての機能があっても良い。

東美濃の森林や伝統文化を活かし、創造性あふれるまちづくりに関する取組み

防災や環境に配慮した安全・安心なまちづくりに関する取組み

- ・岡山県西栗倉村は、森の学校として木材加工の人材育成や製品開発をする若者が集まる好循環ができている事例。中津川市も起業家がたくさん集まり、この森のまちづくりという構想に繋がっていくと理想的だと思う。
- ・今年改正された食料・農業・農村基本法のように、環境への影響を考えた施策が今後進むと考えられるため、「経済のグリーン化」の考え方をベースにしながらか、観光、人づくり、地域経済を考えた政策にしていきたい。
- ・地元市として、面積の8割が森林であり、森や木を活用するということを「森のまちづくり」の大きな柱とし、都会の方々に来てもらい、癒しを得て安らいで仕事もしていただく、二拠点生活のようなことも考えられる。森という資源を活かすということを、市や県の大きな特徴として取り組んでいきたい。

観光振興・まちづくりに関する取組み

- ・首都圏には岐阜県出身者のIT技術者もかなりおり、いずれ地元で貢献したいという思いを強く持っている方は多いため、UIJターンでも特にUターンを注視していきたい。東京・大阪・名古屋に出ていった方たちに戻ってきてもらい、地域の地域資源や森林資源を活用した高付加価値化に繋げていく取組みが重要。
- ・観光の高付加価値化は、何を価値にした時の高付加価値なのかということを考えることが必要。特にインバウンドについては、環境に対する世界の価値観は変わってきているので、未来を見据えた価値を考える必要がある。
- ・観光で国が掲げている高付加価値化とは、1人当たりの消費単価を上げるということ。第4次観光立国推進基本計画では、来年の目標単価が20万円となっており、特に、インバウンドの高付加価値化において、このうちのいくらかを県内消費として獲得するかという点で、二次交通、商品、宿泊など、具体的な数値目標を掲げてしっかり推進していく必要がある。
- ・地方自治体ではオーバーツーリズムの問題が起きており、交通やゴミ、トイレの問題で悩んでいて、計算すると支出の方が多いたことがある。それよりも、1人当たりの消費額をいかに上げるか、富裕層をどのように取り込むのかを考え、少人数で同様の経済効果が得られるのであれば、そちらにシフトするという必要がある。
- ・地元市として、中部総合車両基地を観光資源として活用できるようにJR東海へ要望するとともに、中山道落合宿の本陣は、築200年余と県内で唯一残存する本陣であり、歴史を伝える施設として改修に向けた準備を進めるなど、観

光資源の更なる掘り起しと磨き上げに取り組んで行きたい。

産業振興に関する取組み

- ・工場誘致に関し、リニア駅とそこからの道路も含めたネットワーク整備が重要。
- ・産業の視点で、林業は非常に厳しい状況。林業再生という形で産業構造を作っていく必要がある、ものづくりや仕組みづくり、あるいは人づくりをリンクさせて、長いスパンでサーキュラーエコノミーを構築することが必要。国の政策にも関わるため県内だけでということではないが、林業の国際競争力をどう強化するのか検討いただきたい。
- ・地元市として、工業団地である中津川西部テクノパークの整備に向けて、用地買収を進めているところ。
- ・企業誘致について、地元市で良く考えていただきたいのが、従来型の製造業の企業誘致で行くのか、クリーン型の企業誘致に行くのかという判断は、これから市のイメージに非常に大きく関係してくるということ。同じ企業誘致でも、誘致の仕方や対象を変えていく必要があるのではないかと思う。

基盤整備に関する取組み

- ・公共交通の職業運転手が減る中で、二次交通をどうするのか考える必要があるが、リニア開業の遅れにより、開業までに自動運転が使い物になる可能性がでてきた。一方、普通車のような速度で走ることができるかどうかは分からないため、インフラ整備として道路の改良が必要。普通車よりも低速の自動運転バスが走り且つそこに、外国人サイクリストなどによる観光利用が想定される自転車も共同で使えるような付加車線のようなレーンの整備が重要。
- ・「森のまちづくり」の構想を提案したのは、デジタル社会というものは、必要以上にアナログなライフスタイルを求めるという事実があるため。岐阜県駅は、超高速のリニアと、人が歩く時速4キロの中山道という真逆のものがクロスオーバーしており、道路交通の自転車の活用についてもそのような視点で考えていくことが必要。
- ・在来線との接続は岐阜県駅の1つの特色であり、地元市として、在来線の運行本数の増加、特別快速等の導入をJR東海へ要望していきたい。
- ・開業が10年近く遅れるということをチャンスにして、どのように取組みの熟度を上げていくのが重要。濃飛横断自動車道ができたころに、岐阜県駅が開業すると最高だと考えるぐらいのスケールでものを考えていく必要がある。